第 4 回アジアについての勉強会

1. 日時：2010 年 11 月 17 日（火）15:00～17:00
2. 場所：武田計測先端知財団会議室
3. 講演タイトル
「何故儲けるのかシンガポール」
講演者　Dou Yee International 森脇郁朗氏
4. 出席者：

01	森脇郁朗	Dou Yee International
02	三上良悌	国際開発研究者協会(SRID) ユニコ・インターナショナル元会長
03	小山田和仁	日本学術振興会　国際事業部
04	武田郁夫	財団理事長
05	赤城三男	財団専務理事
06	垂井康夫	財団常任理事
07	溝渕裕三	財団理事
08	大戸範雄	財団理事
09	相崎尚昭	財団 Program Officer
10	姥澤愛子	財団 Program Specialist
11	禿　節史	財団 Program Specialist
12	鴨志田元孝	財団 Program Specialist
13	三井恵美子	財団 Program Officer
14	高見	財団職員

5. 議事録
講師:
大阪市立大学を出た後、三社電気(日本)、Analog Devices 社(米系)、SGS-Thomson 社(欧州系)を経てシンガポールに渡った。シンガポールでは、電気電子製品／半導体用副資材、金属射出成形、クリーンルーム／静電気関連部材装置、ディスペンサー周辺パーツ等の現地商社兼メーカーである Dou Yee International に入り、主として、海外外注展開部門の日系顧客担当として日系各社の現地化促進を行い、17 年間働いて今年帰国した。現地会社に直接就職し、シンガポールの発展をつぶさに見てきたので、経験談を交えてシンガポールの社会と産業についてお話してみたい。
シンガポールの国情

シンガポールは、人口 470 万人、国土面積 700K㎡で、東京都とほぼ同じ程度の面積を持つ都市国家である。国土の数%は埋め立てによって造成したものであり、造成地は現在も拡大している。地図を見ると分かるように、シンガポールは、インド洋と南シナ海を結ぶマラッカ海峡に面し、昔から東南アジアの海上交通の要衛であった。シンガポールは、イギリスの植民地であったが、太平洋戦争の際に日本軍が占領、日本の敗戦後、再度イギリスが植民地化したが、第二次大戦後の独立運動の結果、1957 年にマレーシア連邦として独立した。しかし、マレー人優遇策を取るマレーシア中央政府の下、マレー系と当地華人との間で軋轢が激化、華人が人口の大半を占めるシンガポールとして 1965 年にマレーシア連邦から独立した。国民は、華人 77%、マレー系 14%、インド系 8%、その他となっている。公用語は、英語、マレー語、北京語、タミール語となっているが、国情は、圧倒的に華人の影響が強く、華僑的道徳(無駄をしない。勤勉、清潔、信賞必罰、平等、資産重視)が行き渡っている。政治的には、ほとんど一党独裁で、野党は有るが力は極端に弱い。人口が少ない国に係わらず、最先端の艦船、ジェット戦闘機等を整備し、国民皆兵制度に基礎を置く東南アジア屈指の軍事力を持つ。

シンガポールの社会と産業

海上交通の要衛であること、都市国家であり、資源がほとんどないことがシンガポールの社会と産業を規定する最も大きな要因となっている。世界中から物資、人間、情報を集め、それを利用して儲ける、ということが基本的な戦略であり、港湾、空港が整備され、大学等の教育機関では留学生のみならず、海外からの研究・教授陣や、各方面の有能人事の受入れ体制が整っている。積極的な外資導入政策をとっており、シンガポールの大企業は、ほとんどが外資系である。会社設立は、シンガポール人か永住権を持っている人であれば、銀行口座開設で簡単にできる。シンガポールの永住権は、ある程度の投資ができたり、シンガポールで起業をしようとする人には簡単に取れるようになっている。

国外からの人材募集にも積極的で、日本の人材募集会社もシンガポールに支店を構えている。国内企業で最も大きいのは、シンガポール航空で、地元企業は、数百億円程度の規模に留まっている。国としての GDP は小さいが、一人当たりの資産は大きい。数年前までは、国内にも製造業があったが、人件費が高いためか、現在では、主な製造業は国外に出てしまった。

シンガポールでは、女性の労働は日本より遥かに重要な役割を担っており、特に、経理財務関連での活躍が企業規模に関わらず目立つ。その為の女性の労働

環境が整っており、育児・学校の整備、住み込みメイドの利用も無理無く受け入れられる政策を施している。男性に交じっての対等な活動が常識であり、浮ついた感じは全く見受けられない。簡単な例として、女性の化粧時間は日本のそれより遥かに短い（卑近な例ですが、チャラチャラ感が全く感じられない）。

資源がないことを逆手にとった政策をとっているが、水は、マレーシアからの供給と国内の貯水池に頼っており、安全保障上、大きな課題となっている。近年は、日本の逆浸透膜を使った高度濾過技術を利用して国内の下水を再生処理し、飲料水にも使い始めている。またシンガポールブランド“水”販売を始める会社も現れ実を結んでいる。施策のプライオリティが明確である。

シンガポールと日本の比較（シンガポールの会社社長の意見）

・日本は単一民族社会、シンガポールは多民族社会。
・シンガポールには、4 つの大学があるが、そのうち 3 つの大学の学長は外国人である。
・シンガポール政府の閣僚ですら、数人は、最近、国籍を取得したばかりの外国人。
・日本は日本語だけ、シンガポールは英語と中国語に（＋１、計 3 カ国語以上）を自由に使うことができる。
・シンガポールの社会は外に開いているが、日本社会は内に閉じている。
・シンガポールは安定した政府を持つが、日本の政府上層部は短期で変わる

いい面を持つ一党独裁(開発独裁)で、初代リー・クワンユー時代、その跡を継いだゴー・チョクトン時代のリーダーシップが上手く行き、今の繁栄を誇っている。しかし、一つ間違うと問題の多い北朝鮮や、危ない中近東・アフリカ等々の国々の様になる可能性がある。シンガポールは、建国 50 年を目前にしているが、政治的安定性は、リー・クワンユーの息子の三代目首相リー・シェンロンの力量にかかっている。（シンガポールには大統領は居るが、行事用飾りで、力は無い。）安定の基は、“シンガポールの社会は外に開いている”と云うシンガポーリアン社長のこの一言に尽きると思う。

シンガポールの海外戦略

シンガポール人は、海外へ行くというのは日本で言えば県外に行くという程度の感覚。土地が無い分、海外での活動枠を広げようという意欲を余儀なく持っている。

物的資源が乏しいということから、資産への依存度が非常に大きい。従って、重工業重視ではなく、貿易、営業が主体になる。シンガポール人は、お金の使い方を知っている。感覚として、お昼は屋台で済ませても、ビジネス用の機械は最新式の物を購入する。儲かると思った時には、思い切ってお金を使う。まさに華僑感覚。

質疑応答

質問者 1:

シンガポールに人が集まれば、お金が儲かるという点がよく分からない。どういう仕組みになっているのだろうか。

講演者:

人が来れば、物・金の流れが出来る、それに伴い、お金を使ってもらう、お金が落ちるという事につきる。人・会社が集まる為に必要な事、すなわち『安全』、『清潔』、『便利』、『教育』、『医療』等に集中して資源＝資金を使い、次いで客寄せを行う、例えば、観光に力を入れ、ホテル、夜の F1 レース、国営カジノ等の整備、滞在機会を作る、また、高度の治療が可能な医療施設が数多くあり、海外から医療ツアーで来る人も多い。港湾や空港では、使用料を稼ぐことができる。また、情報を積極的に集め、シンガポールに行けば、様々な情報が手に入るようにしようという戦略を取っている。

質問者 2:

シンガポール人は、自由に海外に出かけ、ビジネスをするようだが、それはどうしてだろうか。

講演者:

普通の人が、今や世界語になっている英語と、人口の多い中国系の言葉（標準の北京語だけでなく）を基に少なくとも 3 カ国以上を子供の頃から自然に話すこと、また、華人系同様にインド系、マレー系、インドネシア系シンガポーリアンにも人材が多数いる、ということが海外との垣根を低くし、自由な取引を支えていると思われる。もう一つは、華僑同士のネットワークだ。シンガポールは、台湾や上海、香港とも密接な関係を持っているし、中国国内にも『シンガポール特区』を持ち、共同事業をやっている。これは、皆、華僑のネットワークを元に出発したものと思われる。また、中国人同士としての連帯感もある。昔、中国が経済を市場化しようとしてうまく行かなかった時、鄧小平がシンガ

ポールのリー・クァンユー首相に助言を求め、中国の経済官僚がシンガポール詣でをしたという経緯もある。こういう背景が、シンガポール人が海外に自由に出ていくことを支えていると思われる。